

〈修士論文要旨〉

紀淡海峡地域を中心とした古代土器製塩

山 本 光 俊*

塩は人間の生命維持にとって必要不可欠なものである。現代では塩を安価に、必要なだけ簡単に手に入れることができるが、古代では生産・流通が未発達であったため、必要なだけ手に入れるには多くの労力を必要とした。弥生時代以降は農耕が主流となり、肉を中心とした食物から摂取する塩分が、縄文時代と比べて減少した。そのため塩分は塩から摂取することが不可欠であった。また、塩は食用だけでなく、祭祀、手工業用など多くの用途に使われていたと考えられる。

古代における塩の生産は、土器製塩が主流であり、その塩を生産する製塩遺跡が海辺に多くあったと考えられる。その中でも、紀淡海峡を中心とした、大阪府南部、淡路島、和歌山県などで多くの製塩遺跡が発見され、調査されているため、この紀淡海峡を中心とした地域を研究の対象地域とした。

製塩遺跡について、近年考古学に活用されはじめている、GISを使ってアプローチできないかと考えた。これまでの土器製塩研究は、製塩土器に関する研究がほとんどであり、製塩遺跡の立地や分布に関する研究はあまり多くなかった。そこで、分布図やカーネル密度、多重バッファなどの空間分析を行い、地域や時期ごとの特徴などを見出せればと考えた。

研究を進めるにあたり、まず基本となる対象地域の製塩土器出土遺跡一覧を作成した。一覧には、どの時期の製塩土器が出土しているのか、遺跡の位置（平面直角座標系）、遺跡の種類（生産又は消費）などの情報を『日本土器製塩研究』、『海の生産用具』、『古墳時代の海人集団を再検討する－「海の生産用具」から20年－』を基本にし、その他の資料や報告書から補足して作成した。

空間分析を行うソフトはArcGISを利用し、地図データは国土地理院の基盤地図情報の10mメッシュを、属性データは先述の製塩土器出土遺跡一覧を使用した。

分布図は、生産遺跡と消費遺跡を区別してそれぞれ、脚台1式～丸底3式、脚台1式・2式・3式・4式、丸底1式・2式・3式の16種類の図を作成した。

カーネル密度は、消費遺跡と生産遺跡を区別せず、脚台1式～丸底3式、脚台1式・2式・3式・4式、丸底1式・2式・3式の8種類の図を作成した。

多重バッファは、移動コストを考慮せず、指定した遺跡から一時間で移動可能な5km、半日で移動可能な15km、一日で移動可能な30kmのバッファを表示した。指定した遺跡は、主要な製塩遺跡と考えた貴船神社遺跡、山田海岸遺跡、小島東遺跡、深山遺跡、西庄遺跡、古目良岩陰遺跡の6ヶ所で、それぞれを中心とした6種類の図を作成した。

平成21年度 *文学研究科文化財史科学専攻

それぞれの図から、時期ごとに密集、拡散、消滅など地域ごとに特徴が出るのがわかった。

生産遺跡については、どの時期でも密集して分布していることがわかる。このことから、統率する存在があるため一定地域に密集しているか、ごく短期の間に一定地域内を移動している可能性が考えられる。

消費遺跡についても、密集して分布しており、生産遺跡からさほど離れない位置に存在するか、ある程度の距離ごとに連なるように位置する。

このことから、生産遺跡近辺と流通の拠点と考えられる遺跡には、製塩土器の形で塩が供給されると考えられる。